**説教20230326ヘブライ5：1-10ヨハネ12：20-33「苦しみから学ぶこと」**

**報道によりますと、この春には全国各地の多くの小学校が閉校になりました。最後の卒業式の様子がユーチューブなどに上げられていて、私たちはそれを見ることが出来ます。その中には、「掲げた教育の高き理想は脈々と受け継がれる」と雄々しく宣言される校長先生もいれば、「やっぱり灘手小学校が閉校してしまうのは、とっても悲しいです」と涙する生徒もいれば、「地区の方の思いもお聞きして閉校を実感し、さみしいなという思いが強いです」ともらい泣きをする保護者達などもおられ、人々の思いは感傷的に高ぶっている様です。**

**この別府の界隈でも既に廃校になった小中学校が複数あって、ある処はその建物が地域学習センターとして生かされ、又、ある処は、校舎の壁にはツタが伸び校庭には雑草がはびこりつつあると言ったように自然に任せた放置状態にあります。**

**その廃校となった場所の一つ一つを覚える時、私は、この場所で営まれた学校の歴史は、その学校がなくなった今、果たして人々に何か確かなものを残したのだろうかと言う、少々、口外しにくい感想を抱いてしまうのです。こんなことを言いますと、その学校に愛着がある近所の方々からおしかりを受けるかも知れませんね。**

**さて、全国各地の教会でも、教会の解散と言うことが現実化してきています。大分県の山間の教会でも礼拝主席が4，5人で、高齢の方ばかり、地域にも若者の姿はまばらで、建物も老朽化が進み、改修する予算もない、と言った、この世の物差しに当てはめれば、遠くない将来に解散となってしまうであろう教会があります。**

**建物はさておいて、信徒の方が一人もいなくなり、日曜日に御言葉の説教が為されなくなり、聖餐式も行われなくなれば、いくら頑張っても、教会は解散とならざるを得ないでしょう。**

**さて教会の場合、先述しました学校の場合と違って、たとえ解散したとしても、確実に後に残されるものがあります。それはイエスキリスト御自身であります。イエスキリストは救いの岩として教会の土台であり、又、教会の頭でもあって、教会はイエスキリストが満ち満ちている処であります。たとえ、信徒達や牧師がいなくなったとしても、教会は滅びることがないのです。**

**教会は、御言葉と言うイエスキリストを頂くところです。御言葉を聞いてそれを日々の糧としてこの世を生きていくのがクリスチャンであります。だから、たとえ建物がなくなったとしても、私たちは日々、御言葉を拠り所として生きていれば、大丈夫なのです。**

**コリントの信徒への手紙二/ 05章 01節**

**わたしたちの地上の住みかである幕屋が滅びても、神によって建物が備えられていることを、わたしたちは知っています。人の手で造られたものではない天にある永遠の住みかです。**

**イエスキリストの地上の住みかであるこの教会、そして私たち一人ひとりの体は、この世の試練にさらされて、日々間違いなく衰えていきます。建物は老朽化していき、何時かは立て直す必要があります。私たちの体は日々弱くなり、不調になって病気になってしまいます。そしてやがてこの地上での体は朽ちてしまうのです。しかしそんな私たちは次の御言葉によって励まされます。**

**コリントの信徒への手紙二4章 16節**

**だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。**

**私たちは一人ひとりの内に住んで下さっている内なる人であるイエスキリストを益々よく知り、み言葉から学んで、それに忠実に歩んで行くのがよいのです。**

**さて、今日のヨハネ福音書の聖書箇所には次の、大変有名で印象深い御言葉が記されています。**

**はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。**

**この御言葉は私たちがこの世の多くの試練のうちを歩まされる中で、いつも覚えておくべき御言葉であります。イエスキリストは十字架と言う最大の苦しみ、試練を味わう前に、この御言葉を語られました。私たちもこの世の歩みの一歩一歩のうちに、多くの苦しみを味わうことになりますが、その苦しみの中で、この御言葉からその都度、学ばされることは大変多いです。**

**私も既に何度かこの御言葉によって説教をしましたが、その都度、この御言葉から教えられることは違っています。この御言葉は一生かかってもその意味を完全に悟ることは出来ないと思われるくらい深いです。**

**以前の説教では、私は、「この世で自分の命を憎む」と言うことにあまり積極的な意味を見出せませんでした。「この世で自分の命を憎め」などと言いますと、この世で未だ信仰をお持ちでない方はつまづいてしまうかもしれません。**

**そのことに忖度した面もありますが、かつての私は、「この世で自分の命を憎め」と言うイエス様の御言葉を、自分の内にある罪や悪い部分から離れよ、という消極的な意味で、捕えていました。**

**しかし、日々新たな苦しみにさらされ、私の「内なる人」イエスキリストが日々新たに大きくなっていく中で、私はもっと積極的に自分の内にある罪や悪い部分を攻撃して、追い出すことが出来るようにされたのです。あるいは、私の内なるイエスキリストが罪や悪い部分を追い出してくれたと言い換えた方が良いかもしれません。**

**私は、このように苦しみの内にこの御言葉によって益々深く学ばされ、自分の内からイエスキリストが罪を追い出して下さることに大変感謝しています。**

**この様に私たちが日々イエスキリストと共に味わう苦しみは、どれも決して無駄になる事はなく、私たちが益々永遠の命の喜びへと近づいていく経験となるでしょう。苦しみが喜びへと変えられるその最大の出来事が、十字架の時でありますが、私たちは十字架の死と復活を味わう前にも、日々の苦しみによって少しづつ、古い自分が死に、新しい自分が生まれるという喜びの経験へといざなわれているのです。**

**さて、私たちが日々味わされる苦しみとは大変、現実的で具体的な事であります。それは仕事上の悩みであったり、又ご家庭の不和の問題であったり、御自身のお体の不調の問題であったり、いじめに直面している問題であったりします。**

**イエスキリストという御方は、十字架上で、これ以上にない苦しみを受けて、罪を着せられ血を流されて、私たちを救われました。私たちは、十字架上で血を流され苦しまれるイエス様のお姿を、よく思い出すことでしょう。しかし、そのイエス様が現実的具体的に日々の私たちの苦しみに寄り添い癒して下さる姿は、もっと繊細で細やかな配慮にみちたものです。その様子は今日のヘブライ書の箇所に記されています。**

**5章 02節**

**大祭司は、自分自身も弱さを身にまとっているので、無知な人、迷っている人を思いやることができるのです。**

**ここでの大祭司とはイエス様のことを指しますが、イエス様は自分自身も朽ちる身体という弱さを身にまといながら、人として、無知な人、迷っている人を思いやることができるのです。**

**この御言葉の中の、思いやるという言葉も、又私たちが一生かかっても極めつくせない意味を持っています。ある註解書にはこの「思いやる」という言葉に対して次のような詳細な解説が記されています。**

**この「思いやる」という言葉は実に素晴らしい語で、いらだたず、迷惑がらずに忍耐して人に接する能力、おろかな人、分かりの悪い人、同じことを何度聞いても、一向に理解できない人に対してもいらだちを抑える能力をいう。また他人の過ちを怒ったり、悔んだりせず、その日の内に気持ちを整理して、やさしくしかも力強く気持ちを察し忍耐してその人を正しい道に連れ戻す態度、人を見捨てることなく、人間の中にある神に対する反抗心を認めながらも、何とかして優しく神に導き返そうとする態度である。**

**もし学校のお勉強で「この思いやるという語句の意味は何ですか」という問題が出て、この通りに回答をすれば、私たちは100点満点の評価を頂けるに違いありません。この解答は至れり尽くせりで、誤ったところがないからです。**

**しかし、皆さますでにお気付きのことかも知れませんが、私たちが苦しみの現実的具体的状況のなかで、イエス様から学ばされることは、こういった机上の模範解答ではないのです。**

**イエス様と私たちは、自分自身の弱さを身にまといながら、いわば机の上の学びの場所を抜け出して、今ここに生身の肉体をさらけ出しながら、現実的具体的な苦しみを味わいつつ、この「思いやる」という御言葉の深い意味を、味わい知らされているのです。**

**又、私たちがこの教会から世の中へと遣わされて送る日々の生活にあっては、この「思いやる」という御言葉は、私たちが隣人愛を実践する為の励ましや知恵や心の持ち方を教えてくださる御言葉として、その都度私たちの心に響いてくることでしょう。**

**私たちが今受難節にあって、苦しみの内にこうして教会へと集められているのはなぜでしょうか。毎週毎週私たちは教会へと足を運びます。それはなぜかと言いますと、この苦しみから学ぶということが、私たちが、多くの苦しみの積み重ねの一つひとつによってだんだんと学ばされていくのだということにほかなりません。**

**確かに、十字架の苦しみは、私たちがイエス様に引き寄せられ永遠の喜びに入ることが出来る決定的な出来事でありますが、私たちは十字架に至る前に、日々、多くの苦しみを味わうことが出来るようにされています。敢えて、苦しみを味わうことが出来ると表現しましたが、私たちは苦しみにあってこそ、イエス様にその都度救いを求め、そして救いの喜びを味わうことが出来るからです。**

**ヘブライ人への手紙/ 05章 08節**

**キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。**

**イエス様は私たちと同じ人となられて、私たちと同じ日常を過ごし、私たちの日々のあらゆる苦しみに、その都度寄り添い、思いやって下さる方となられました。私たちは今、苦しみの中でそのイエス様の慈しみとまこととを体験している処であります。だんだんとイエス様の慈しみとまことは、一人ひとりの内で深められることでしょう。**

**そして、同時に私たちはその慈しみとまことによって、隣人愛をより豊かに行う者たちへと日々変えられていくことでしょう。**

**祈り**

**だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。**

**天に居られる私たちの父なる神様、内なる御子イエス様をわたしたちのうちの与えて下さり感謝します。私たちは、この世の日々の生活において、体の衰えや、心が弱められることによって、多くの苦しみを味わっています。しかし、イエス様は私たちを見捨てることなく、日々ますます豊かに私たちを救いの喜びへと導いて下さいます。その大いなる恵みに感謝し、御名をほめたたえます。**

**滅びることがない御子イエス様と共に、私たちがいつまでも口をそろえて御名をほめたたえることが出来ますように。**

**今は召されて、慈しまれながら、御国へと向かわれている召天者のおひとりおひとりを覚えます。この世での滅びから救われ、尽きることがない祝福をお受けになる方々を覚え、あなたに感謝と賛美を捧げます。**

**又、あなたはこの地にある全ての人を慈しまれます。その計り知れない慈しみが全ての逝去者の上にもありますように。あなたに全てをお委ねします。**